



布袋菴集

中村俊定文庫
文庫 18
679



可考

布袋菴集序



山川鍾秀以養物資人也昔人跋履高山
 名川而挾雲霞風霜氣因以資長文思矣
 今搢紳處士不好遊衆人不得其所以遊
 焉惟諧師欲足跡踵於遐陬奧區資其秀
 氣以富瞻胸懷耳吾聞鴻巢人橫田柳几

好山水遊殆遍於天下矣蓋有所資而發
於吟咏是以有雄逸之致前後刊行若而
卷可以觀其遊躅之所窮矣是集也平居
諷詠不涉遊事雖研思之由亦有秀氣資
焉始柳几受業麥林又事柳居而日新渾
化以青藍見推人無間然既歿後社友相

謀謂我業乏其人則不可不遺師承軌範
於後之同好也乃請其子柳也鏤梓以公
于世佷人請余序弗已余不知其歸趣難
乎置辭雖小道必有可觀焉蓋有取而然我
何論哉甲寅正月 關脩齡撰





布袋菴叢句集



宗旦

日影赤きほのや如昔——と物乃春
 君の代や海も志つての年 初見
 花ももぬまの教や山持
 よひを告りて——女以馬
 大服おきのわきに乃をらむじ
 管掃也濱乃生砂子れ拾ひ物



鳥さき来て葉子下し多之葉をさす

伊勢訪き今也あまのこ

水や増か子祿ちとと神あり

天地乃鑄物師ありとと森羅

葉象の只のあこちやうととさか

根あ〜〜〜初日景

新室よ春を運ん

名日やあも神代乃あ〜〜割

人日

七日すて鶴の何つとれも葉集

さのよとわ〜〜〜あや前草

葉〜〜〜たを〜〜〜あわの葉

七種か言を相職乃と〜〜〜れ

招餌も〜〜〜七日とす〜〜〜葉摘

七葉や葉と〜〜〜ハ葉前〜〜〜の

太ち〜〜〜な〜〜〜あ香や少松川

は〜〜〜植〜〜〜風か蒼や小松川

米我松〜〜〜葉於年々

其齡多よ乃きれ日や少松川

二涼軒とらるる

人日を何と定す

七のやにふくの葉も揚るゝ

鶯

くろくろあやあゝの船を鳴出ぬ
あゝのなまはれもなほとくぬ
うぐしきや氷の聲も子置は
鶯乃一首やさきき日 和乞
宗是る妻や能乃初言いふ入の
あやあやとくぬお引多物
うぐしきや杉の啼りかききい

い勢
あゝあゝ

此のやにふくの葉も揚るゝ

伊勢古市

長原亭より

あやあやの葉も揚るゝ

尾城下

巴菴おき方菴の指まき

あやあやの葉も揚るゝ

梅

あやあやの葉も揚るゝ
解るあやの葉も揚るゝ

すめうらやまゝ物なきかたきぬし
腕者乃珍きわたりもや梅の香
梅の香やあつし高き年のほど
むめさゝや庭におそ遠き此白うい
存もよや細目もゆゝゝめか花

東都 梅やしきうい

わ青入裡より一斗梅のよ〜

名古庵 丁敷子のまいたすひん〜

まのゆか梅より果ふ 柳 一斗南

きね園

おあ風子の訪き〜

ぬ〜美し風か光や 豊後梅

々 柳

子ゆかいも雪ささあまう 梅の種
白梅とまらうと老木かやまきこれ
多のすけり推多お接る柳うら
風おひさうあ城流る種な裏か南
老う葉枯をゆかへ柳一斗種
昔柳やこの葉もはし種はは

あゝいふかしのうらみは柳の

雲

沖中を眺らむとて道はのほろみか
能く知くはるるあはれもや又うす
目海の子みねなるぬうす
よそかたのうらみも船を待たぬあはれ
海をみるもはるるあはれもや
おらむとて山あはれもはるるあはれ

諷句
妙機山より

山は乃手織を厚く

猫乃意

あゝあはれも粟津もあはれも
又来るといふ添麻やぬらみ
あゝ我の跡をみぬや 猫乃意
法入のおのうらみも猫乃意
書きたる猫や庭乃あはれ

風巾

庭より居るも風巾

さる内城のききもつらひのうのほろこ
市中やせも押合ふはうのたも理
風折くあさこのおきや風中

江都

まあ阿光をのりて院にさあ

らもも本心皆塵のうきこいこのあり

色白乃

空裡存も訪りぬ

一重水子あき程高——風中

蝶

椿

蝶くや麻さうくまて水鏡

こふくや辻らよ出るおのこま
蝶くやまふひまきぬるあつり
あは古おははき候もつらき
古寺やおそりきげらる椿
葉もくまひ子代乃あまは椿
片断おひら

蝶い川きくあさうのうららのあ

伊勢山田十文書

杜十文字もあ

こふもおあや木枕あさうら

涅槃會

てくろくあるものそ 鐘なり涅槃像
施業出のきく甲斐なき 佛人像
ねえん令孫之きく佛のそ ねえん

新月

うらみの雲の啼 あくく おほろ月
水くまのよきあまの相のす 新月
一おほろ雲のねえんは ねえん
ねえんはよけああ聲やねえん

ぼんありとありなきのおやねえん

春雨

くるくるやあまの掃ぬりねあつり
ねえんはねえんはあまのあまのあ
あまのあまのあ神馬やあまのあ
あまのあまのああまのあ
あまのあまのああまのあ
あまのあまのああまのあ
あまのあまのああまのあ
あまのあまのああまのあ

長崎乃事なり
新藤子孫殿なり

通し物入しぬ 藤言聞しやまの南

若子 菫 蒲公 菜の花

わつらふやあは定ぬ内さうり
あつやいつらさる砂乃舟
つらつらやあまはつら 都人
和系そのみ屬や 風乃舟
引つらつら 杉さるあはつら
一はつらつら 福はつらつら
つらつらつらつらつらつらつら

福さあや 里さ 酸はあはつら
あまらあや 葉は地をあはつら
蒲公や 猪首はさるあはつら
菜のあや 里さ 油をさるあはつら
なつらあや 道あはつらつらつら
菜はあや 門はつらつらつら
紫雲 大徳寺のほりま
静さあ 草はつらつらつら

甘藷能

朝もや尾落し〜花芝の中

出代 蕨の

出代や冠〜破多編〜
〜〜〜花月也華花〜
出代や改〜花章の〜
蕨のや〜〜云々

雪問

雪問

雪問

雪問

雪問や〜水〜花〜雪問の雪

燕子〜新見〜橋乃〜

雲雀 帰馬

雲雀清〜夢〜消〜雪雀哉
雲雀い〜川山〜高〜い〜
〜〜〜也〜〜〜物〜
〜〜〜名〜〜〜雀〜
晩鐘子〜〜〜雀〜
ぬ〜人〜時〜〜〜雀

駒鳥

鳥うらまひとらるるぬららるる

駒鳥

鳥葉

子雀

駒鳥子報う川うけや風折枝
駒鳥や翔るやうも葉なるり
葉かきや人子乃りぬる子雀
子雀や 雀々 雀々 雀々

雀子雀

雀川

鳥追

松人小葉の傳ふやよぬらるる
雀葉子又返る葉や 雀子鳥

雀川や物ぬらるる奥の雀
雀川や 市中子人のおとこ

雀

雀

雀玉さゆ人子酔らるる山雀
雀川中よりぬらるる初さる
里人のうらまひさるる山雀
山雀子なる日やよる雀
雀川さるる雀川 初雀
雀多き雀川さるる雀

初糸也蝶の影の分る今も今も
獨りきく枯枝披き花影の重

伊勢義上園

危土老人の訪り

あゝるハ稀とあゝるはほろろ

ニんみみ浦

ちねむを砂る千 松子前繪

いと珍本如之飯より

丹ま乃工にたる紙福

鶯も繪うらぬけたれ心は骨

東叡山より

福リハ管聞出はやむ子矣

日暮一山の

系又

押有るやあま七白乃川

飛彈滄洲より

榎の葉を意はる

あゝるはぬ境ある阿の集り

鳴沙千代奈氏

意翁の訪を

此乃やそ月むはく

上巳

盤

枕

汐下

曲水

菴餅

あゝるのまの世もあゝる離る

ゆきゆき合ふ中もあまきし雲籠
抱ふ子強ふやいまのふ所
柳うらの春も離れ水祝ひ
かゝ河水もあまきし柳の春
鹿さしや村子源と井戸い川
ふくまきとあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春

曲水や問いしあまきし川柳
あまの春もあまきしあまの春
曲水やあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春
あまの春もあまきしあまの春

上野吉井池村
羊舌太夫の碑

あまの春もあまきしあまの春

さきとあさし〜物〜内なる

本都中野〜

桃をゆ〜女〜に日乃〜の中野

紀伊熊野

本島温泉あり

あゝのや 出湯 能 笑と〜さり

苗代

蛙

あゝ〜首子あゝさう〜はま 苗代田
苗代やさ〜う〜庫も移たろ〜
あゝ〜うらよ 出湯 能 笑と〜さり
あゝ〜うらよ〜出湯 能 笑と〜さり

あゝ〜あ 哉か〜〜〜 啼〜うらよ
曙〜午ノ 寂を〜つるも〜能 掃可 形
うら〜うらよ〜志〜時〜か 蛙か 騒
湖〜縁〜暮〜白〜から 川〜う 南
舟 相〜うらよ 啼も あ〜から 川〜う 南

海棠

山吹

蓮翹

躑躅

木瓜

海棠 能 出 木 也 庭 能 茶 々 々 々
かゝ〜さ〜や 志 乃 首子 入〜る 春 乃 何
海棠 乃 庭 能 也 風 能 也 起 止

海棠や日あふもほろほろの海
やまゆきやわつらうまのつらき
山吹や巻くははまのほろほろ
花満ふれや檜垣に娘もあはれあり
ら吹や水ききあひのりなかり
おぬれを雨土も夢路つらきな
うらうらと強きさなれあつた
雲翹やあまのつらきな
雲きくや物もあまのつらき

意々〜 雲あつた〜 雲きくや
おぬれを雨土も夢路つらき

橋本 木葉

湯 暮

山吹

おぬれを雨土も夢路つらき
しつらうまのつらき
花満ふれや檜垣に娘もあはれあり
山吹や巻くははまのほろほろ
花満ふれや檜垣に娘もあはれあり
おぬれを雨土も夢路つらき

白藟石と雪をたふす山ありて
のちるくや暗籠るるいふありて
遊るるくしんるるあまや春乃風
地くりるるくしんるるあまや春乃風

春乃魚

白魚やあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや

わの鮎や甲を自畫のさくさく
遊るるあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや

滄塞

伊震やまな麻子結るるあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや
あまやあまやあまやあまやあまや

藤

ゆりさきくきくけおれ
よみものよ結き咲きぬらぬ
あち乃ちる枝ゆみさつ
さくぬさくきよ浪やる花

伊勢子 鞆うねり

山乃名や志くくくくく
非初をまんとまるとに古物證連中
世義寺子一序紙中さきく
しきや一日結ふゆらんく
いさの 洲うけ松き

糸目も錢一やや松子ふ

春暮 三月盡

千金も牡丹も智く
しきや柳ききく結きさ
やあきあきささく蝶の夢
葉中も結きさくくさきぬ
ふああす小橋きさくく三月葉

出流山岩屋 春向親世音あ

しきやきくたのめさくく

菅神御忌

初台

所あはぬ梅花ぬさより神の
神垣や砂子多智の柳
梅のや通ぬ花練乃庵の時
葉よとぬ花結乃ちりや草花

飛鳥

連歌堂

多し事々梅花等々多き事
ころや細通さぬ畏もあま
初午や押繪花も事々

まふや 藤花健き百の合は

らふ

新無

長きや 茶花も花あま

はせ乃西川

芭蕉翁榎塚

長きや 洞中ぬ花木榎塚

麻島

要石

物多八国より花ゆけかき

新堂川

まふの事

春空 梅もはらたす神の備

いせ妻木の子孫の記

十三年乃再命を授け

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

赤松坊十七回云

赤松坊乃又書を授け

又書千一十時能、日向一十南

尾州

あまのつらぬあまのつらぬ

夕暮やありく乃赤松の子孫

少ねに申す

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

伊勢の神風能あて

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

三保の子孫

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

源光坊の記

いせの池

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

乃其時々わらわぬ顔の百子孫

袖師の浦師のり

かゝる袖師の浦師の一

付島の子後浪

本吉の子孫

孫浪や乃禮のり

子孫のり

崎の原に極楽あり

本交津

きよきよきよきよきよきよきよきよきよ

千州濱

貝よやあき千種を

きわむ村といふ里あり

菜のやあきなる人ね様栗毛

鹿野山橋

吹よき〜麻子んや名の橋

人思ふ麻子か〜

近江花仙長坂

利控〜喜海〜鏡山

多感庵散句集

更心

海鏡も池をめぐるとや心うつる
空の鳥も乃蝶ふきのそり心うつる
鳥をなす人の心もやうつるも
一口を食ふとくちなるまに心うつる
琵琶抱く猿も心うつる
海鏡も池をめぐるとや心うつる

雲をぬくとや山も乃石うん
噴しそほ海に ちんちんちん

仙醫

魚壺其に

圓法師に裸をてん 又石

ろふ房のけき

白の色

白も腹に人いさる ちんちん

灌佛

猶能法を為す 殊る佛生會

灌佛也本に勝る ちんちん

ゆびさひき漏乃柱に也佛生會

取り能住居る ちんちん

物のぬらふ 蓋の合はる ちんちん

卯のころにゆき 福や佛生會

お目白

ちんちん

遊まハと朝とおり人そ也佛

古寺にちんちん 目くらやちんちん

杜多

以骨

ちんちんの船をちんちん ちんちん

新屋智

涼くみあ福くひらきけれみ知

切ほれ

十石所掘りきり

十あ〜んきとれみあきり十石

ま〜ん

急か〜んきたれやる多れ遠く口
垣分んれあきり〜やま〜ん
影みれ〜ん重白のあ〜や青の慮
福れ子乃け〜ん〜あ〜んわ〜ん慮

郭公

急か〜ん水いふ初るあ〜ん〜んきあ
〜ん〜んあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
二〜ん〜んあ〜ん〜んあ〜ん〜んあ〜ん
ま〜ん種を甲〜ん〜んあ〜んや子親
梅のほ〜ん〜んあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
彫。筆と〜ん〜んあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
水〜ん〜んあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん
世〜ん〜んあ〜んあ〜んあ〜んあ〜ん

物是る友より待〜あ〜あす
起〜小鍵裂さき〜ほ〜きん

明人麻呂堂〜

不万七〜待目通也郭〜

二千余の書を〜

東部を臨に〜

ち〜し〜老木と〜す〜

築船〜

鉄炮のき〜り〜

且利を換〜

あ〜い〜ほ〜く〜

と〜

〜

あ〜や〜か〜あ〜

耕田意〜

書〜

あ〜ま〜に〜耕〜

城〜

在〜

死〜

男認辨世音

鳥酔狂帖

ほ〜あ〜す〜

加世吉やま

野原一やあらしるる海か人こ
自糸子おまけの行し 冨吉鳥
岡吉るるやま前秋乃暮
音のいもまてく一白おこり人こ
人事おまてく海かや凍鞍
物束く一人をさけてのま
あま後物おまてく海かや岡吉鳥
何れも皆無まてく海かや岡吉鳥

艾子

縁よりさる印のあがりき
二十かたのあがりき
白あまやうさるる海かや岡吉鳥

卯ら

空か波難乃中や一き
卯のあまやうさるる海かや岡吉鳥
うれさるる海かや岡吉鳥
卯のあまやうさるる海かや岡吉鳥

卯ら

下や

卯ら

夏山

高き山房にたやわらさる
やわらさるをあらふはる葉を
目れおらる。山のさつちあつち
雨乃早あられし事し美あつち南
風の程をかへてさるやまを
きんしは流をさるやまをさる

秋の七ゆき

妙はち村お臨火

首は火おかきしきんを本ら園

仙臺止る庵

止るぬきをが——庵に百多木を

鳥の 宮方の場

下や——やもまの路乃おや

出ぬ 羽鳥の

——のしきやまの——清——おま

成お終る綴

まの十二しきやいさうの綴

舞のうら 美楓

舞のうら 美楓

ふさふさやにわくふたそよよ

桐生町 職在

錦織の秋は色もついでに

老鷺 祢元

そよよ老のそよよ女はあまのそよよ

そよよのそよよ老の聲もそよよ

秋のそよよはそよよのそよよ

信州 陸羽

皆為秋老のそよよ 湖水 一可

麦秋

目をうらやみけのそよよも秋

さやちのそよよ御製はあまの露

麦秋や川をくぐりゆくそよよ

さきあまのそよよのそよよ

世の中はそよよのそよよ

そよよのそよよ 麦乃秋

そよよのそよよのそよよ

善光寺 出井

まろ刈や印さあまのり

扇子 團扇

東坡の書に「扇子、價甚昂、暑く候に、
汗を拭くに、扇をもちて、おもしろや
其の妙なる、涼しき、と、評す、
よし、と、いふ、こと、あり、

まのわく扇さあまのり

松の白扇

松風もあまのり
西のり、扇、手、底、大、あ、り、た、り、な
結、搦、る、に、風、お、お、ぬ、こ、り、と、い、ふ、

あつたききき扇さあまのり

越後柿崎の標印あり

柿崎やまのり

扇

浮きや身端さあまのり
空、羽、也、柄、さ、り、回、を、廻、つ、た、り、
扇、や、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
評、や、風、お、お、ぬ、こ、り、と、い、ふ、

夏水鳥

息

流さしとおのの影も半葉集
 以嬉や居る籠居ぬつるもつり
 朝書み柳りささ水籠の車
 其志ささるる自智のお籠が
 青鷺也柳の物ささ乃か
 物つらひ乃弦き鳥れ自お哉
 あを飲き火をのむ影也鴉の舞
 物まじやこら咽さおさ海に
 とく若みお聲も透間ささるる

よ〜〜切や柳りささ啼己うを

誠後の國

親ま〜のうて

あか子あのをさ〜柳りや親ま〜

新写番別

葉をささ〜わつ柳〜やなほ

武崎五

小信森沼よて

鴨のさみ信る〜居み形るや

大津巨洲のさ乃

水橋

鳴み葉の〜さる〜楼せ上

と

仰見船形

一ツ葉也 押合舟の浮橋鳥

長崎姥の懐子

長崎を歌

鴨乃子也 姥の懐子 入出の

長崎村山氏

水橋

琴の子 多きも 舟や 葉の懐

川橋

川形也 橋の懐子 是も

川乃子也 橋の懐子 是も

海乃子也 橋の懐子 是も 初松息

市中乃子 橋の懐子 是も

諸草花

橋乃子 橋の懐子 是も 高あ

龍燈乃子 橋の懐子 是も

同舎繪乃子 橋の懐子 是も

吹舟乃子 橋の懐子 是も

接子乃子 橋の懐子 是も

風車乃子 橋の懐子 是も

くさくさく伊幸に改め車百合

奥みま摺のふり

夏そのくさくかきけ移や志に燭より

いさ乃 音高村

夏州や後橋もたの宮乃あ

栗のむ 桐忌 合欽木

月をさるるさる経一 栗に

るこれの磯くさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

福みおむさくさくさくさく

織中の毛もさくさくさくさく

木の端さくさくさくさく

編幅 舟のさ 帆 音水

編幅や坂やうさくさくさく

かきさくさくさくさくさく

うわほりさくさくさくさく

舟のあやらふさくさくさく

たさのさや句いさくさくさく

泣きらのやうにうらやうにうらやう
蓋のうらやうの朝霧や 一ねすし
昔のうらやうのうらやう

穠 せきうくあいのよ
かしくさあやうにうらやう

昔のうらやうの朝霧や 一ねすし

瑞午

山風志都てりあはれ乃あううら
平月多能水柱ハ音 新阿やめ
君う代や餅の菓をうらさうらう

白りきねはらあ九まや若蒲愛

あやあまのうらうつあはれ蓬うら
孫あはれ蓬うらうらああのみを
君う代乃平日れ風や秋れあ

伊香保

岸六左うらう

昔のうらうらうのうらやあまの湯の余

野屋

みーのねをうらうのうらあ帳か
葉かうらうのうらうあうてうらう

京三条通柳の三坊
色江屋何くし猿河う

九重の猿寝を地をけつる成

旱雨

枝も根もけつる五月の雨
古御は乃尾流りりさつたふ
者もさつたわくぬ水や旱月雨
さつた水やけつる雨もさつた
五月の雨もさつた五月の雨
枝もけつる五月の雨

為思乃松

五月雨の中の新也松乃陰

改題

一日乃雨上能果成松やう
雨止も我由り存る松乃松

松

松明れをよめるも有る松乃松
川水も腐らぬもの有る松乃松
引よめる松乃松乃松乃松

遊遊々々人を静めたる所
此の遊遊は火もあらず
入るるをてふもさす
尾草境

戸心人字さ如愈まほしき

蝸牛

角玉物さくおのる
這はるるもさす
さくも水も流るるの
蝸牛

尺とつるるも知恵ハ行

留るる戸もさす
大陰寺

田植

子てめや愈きぬ
病るるもさす
あまをり
一人てさ
あてめや

早乙女や一日もあらず
百里も風をうりぬまの
是よと心も人にもまらぬ

奥の尾

尾の暁

調りぬ波の砂さよ田うんと

壺乃研

石もあらずとらぬ田うんと

壺乃研

夕月

壺乃研のあはれいづれなり

壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり
壺乃研のあはれいづれなり

祖父良田三田長年

百生能奈乃る夢の恩

櫛麻

水正

出来方おとせぬ櫛麻

福影く福よりなるもの相

氷室 富士福

と〜〜乃葛〜〜と〜〜氷室我
 子ゆり〜〜熱いものより氷室我
 あ〜ゆもの〜雪行く〜ひら〜り雪
 子ゆり〜〜遊〜り〜氷室 山南
 豆蔵主人のゆ〜り〜氷室
 若菜の鹿子ゆ〜り〜氷室
 新法師の園〜り〜氷室

雲水峰のゆ〜り〜氷室

赤松山王祭

赤水のゆ〜り〜氷室

龍戸

糸のゆ〜り〜氷室

京祇園祭

白鳥の神輿のゆ〜り〜氷室
 神事會のゆ〜り〜氷室

吾先寺

神事會

月鉾や影を田毎を渡りては

加茂乃夢多

祭見わとあはれをさかへて車

美舟

若竹や靡くうらみは色もは

わくくもやあはれをさかへて

美舟やあはれをさかへて

あはれをさかへて

あはれをさかへて

白雨

夕暮や村々空を依掛いひ

けしきもや禪心をかへて

白鳥やる戸乃おとけみ

あはれをさかへて

あはれをさかへて

清水

松の葉乃針もえしは

あはれをさかへて

臨みなむ物なりとすらふ志も川に流
雨をうけそ中へは清水の籠
委と委の顔又合ふ志も川に流
うらぬのそらみや委く一柳の

芳浩の國

みの榴後りまゝは清き水あり哉

蝶

暑き日は此の如くありとすは静
増亭や羽の清き水を折るる

とらふもやとすは清き水を折るる

暑

心は静くもつらと静の中は日者哉
隙を身を抱あやしたは暑きや
幽々もやとすは息つゝ暑哉
暑き日は此の如くありとすは静
多き静みの風端をうらあつたや

那は静かき生るる

不暑かき抱るるをぬきし中

湯殿山より

雲端より若き洞子湯殿う南

古用子

切房より見る日もあり古用子
幾人よもあそびをたのむや古用子

此原村

又疎寺あり

出子や智恵をたのむく納子の

雲峯

塔はくすまふよー雲のくすまふ

雲のくすまふ 其日くの出まふふふふ
岩まきくすまふ湯くすまふ雲のくすまふ
裾くすまふくすまふ松原や雲乃峯
くすまふ物くすまふくすまふくすまふ
くすまふ乃人子回やくすまふ乃みね

秋を講より江都へくすまふ

加賀の喜水くすまふ新を新せ

おりの湯くすまふくすまふくすまふ雲乃峯

越後出くすまふくすまふ

此浦に水くすまふくすまふ雲乃峯

涼風

薰風

起り山甫甫ふ山也又々々々
見りものよ後れ物々々涼う露
涼うさや膚子通れ川子音
身子あきるふと嬉しきや又涼
物はれ短はく高し一もさくこ
涼風乃さきさく加減や一麻入
物清う成す池に涼うさ
涼うさや学れさあうさの帆行帆

越後千曲川

平
くも楫を魯新ちるさ川
加賀乃人々々出りしれ

さ
川新あきさくをさ懐あ
誠乃意傍
牡牛よあうさ

あ
あ涼
榎日のまは文板

半
半うさあ風れ薫うやま乃板
松るあきさくさく
尾子白尼と孫立

島流の翅千ノ涼
——
二蓋

伊豆熱海一登橋より

景も目の能く是くぬや 又きく

松をゆきく

涼きく水原の節りぬ流も有

日走の山

和風乃草子や瑠璃能きく

意えぬ流も

きく流も意えぬく流も

上野河田伽葉山より

夏空 涼きく 意えぬく流も 伽葉山

浪華より

きく流も意えぬく流も 橋の影

一条廊の橋より

涼きく斜や藤生るく廊の橋

夏後

きく流も意えぬく流も 柳の影

きく流も意えぬく流も 橋の影

瀧出たふも扇多や海抜川

長崎番別

柳さへく館より出た茅庵もれ

夏葉 紫陽花

夏葉りや節夕をさへぬる静

たつ葉やあそびふらふらふ時

紫陽花の目めくさる藍の泡

下院坂の家相高氏より

のきくは民院の館や中さく

飛騨の穂波公

昇進をかく

位山出く程さる保をさる葉

伊賀の相向

葉出蒼より

聞よりあそびの節庵やまは結

信法坊流乃

雅好よりあそびをさる

このもも梅さる田毎乃中さる

江都飛節庵の号に

秋よせぬくはく庵にさる

長崎より阿葉院から

初よりさる

天竺之可也 石大矣 死入法時

字法 善樂山 新福寺云々

唐韻を一夜に聞や 松の蟬ノ

瀛州白峯崇徳院御廟

松のや 今古探 松の法 松の寺

天竺寺云々

法淨の 善識調や 蟬の聲ノ

音 蟬云々

~~~~~ 志の~~~~~ 松 一口松

夏月

短松や 入~~~~~ 松の月

~~~~~ 松の 松の 松の 松の 松の

惠を法師の画勢云々

~~~~~ 松の 松の 松の 松の 松の

檀水浦云々

短松や 其間 松の 松の 松の

次唐云々

次唐云々 葉松 松の 松の 松の



園防岩國錦帯橋あり

中絶如帯子橋あり

羅布天祥山あり

沛山より雷乃新しや雲の峰

川神の法身とて雷あり

藤子為や藤あり

卯日十三百西津

芭蕉庵あり

伊佐の茶を製する

茶造り古道細

舟遊船

肥前松葉雨催し

船より仲子板向也

長崎南条寺あり

昔ありやち子名あり

強志支那寺

報相寺

船子所あり

皇太后此禁あり

あまのこ影や



古事類聚待あり

本方寺あり

たつたつたの風 弘葉也 東方寺

二つて浦前松の松あり

三つて月能廣出 涼し松の上

治智恩院新造弘葉あり

寺涼し 軒より傘弘葉あり

をばつて浦後の風あり

涼しとや備後近江も一と坐交

國分山知作庵弘葉あり

たのまれし推子多ありや下涼し

讃岐金昆羅山あり

牙ほほしとる月涼し 象頭山

まね福山あり

園中より挿伸きとや 蕨草

安藝岩島弘葉あり

香の園乃圓扇涼し 涼し

海に福園海の中あり

まろしとや海に神代新造道



古蹟 石下

村山氏墓所

古蹟の跡は如斯くも也 河原 杉

如きき如き也

如きき如き行きて 碑の面

多古碑

古蹟の跡は如斯くも也 入野 碑の面

布衣庵叢句集

立秋

秋は来るも水も来りて 秋の秋  
木乃如也 自秋意也 今朝乃秋  
夕秋 秋意を 今朝乃秋  
火より 秋意を 今朝乃秋  
浮きよの 秋意を 今朝乃秋



そりお留やいやりと今朝乃秋  
風をさやんや極よにさおあま  
想ふお物やさし今朝此秋  
空よさしと遠者の細や今朝の妹  
とらあまやさし物多々相思ふ

朝顔

舞やおのへを糸おこりさ  
あささしほや命お喜愛に延あさ  
用おあまお写や舞乃とらさ

朝らやあさし舞極とらさ  
阿ささしほや命お喜愛に延あさ  
舞は手書や暗さしとらさ  
あささしほや命お喜愛に延あさ  
朝顔や二朝三朝出さし相思  
舞やさしとらさ舞極とらさ  
あさか保や法生と居終る柳垣  
あささしほや命お喜愛に延あさ

柳居生を

さしとらさ



葦花やそよよの枝を川に流す

一葉

淋しき水は川を流すいささか  
とほほま物よ音なまの一葉  
掃庭の園子かまや桐つ葉  
穠密なる山陰乃つ葉の緑  
百変乃足ぬはるしうらま

七ノ

葦花やそよよの枝を川に流す

初雪かまや星が床  
ほろあいやすく神よぬち  
葦花やそよよの枝を川  
きのあやう枝乃橋あり阿ふ  
石ののう知ぬとまは女七ノ  
更しりし雪か減や川少神  
夕風やふきよの娘乃海舟  
稲妻乃橋を投るやめ女七  
七のやあはるしうらま



夕日

夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日

盆會

所 翁子も此世に果や玉きりり  
魂 柵や押合ふ影もさるる  
身 魂乃やとるもあつる  
入 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日

踊

角力

時 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
物 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
親 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日  
忘 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日

八幡

角力 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日 夕日







神是しきお唐如くも也新乃角

花林土

洞々々々々々おのくと心知るる  
呉振舞も亦々々々目々々の足踏  
匠心のあささ々々々々々々の  
響々々々々々々々々々はたさ乃の  
さあ物乃ひらうあささ々々々々  
さあ物乃ひらうあささ々々々々

響々

地藏ささおこさ々々々々  
響々々々々々々々々々々々々々  
か々々々々々々々々々々々々々

木槿

一ト枝々々々々々々々々々々  
響々々々々々々々々々々々々々  
響々々々々々々々々々々々々々  
響々々々々々々々々々々々々々  
響々々々々々々々々々々々々々



望人を防く意なり。市榷恒  
あり。此語きとて。如あし。く。は。ま。

た。く。身。 定。く。枯。

め。く。川。く。く。く。八。九。人。あ。れ。れ。爲。く。南。  
り。く。く。く。月。能。果。を。る。く。之。は。く。く。  
②。く。く。果。き。く。く。く。く。く。際。を。ま。り。爲。く。  
心。く。く。く。あ。く。く。く。や。解。事。一。能。風。く。く。州。  
得。今。く。く。く。手。を。而。き。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
く。く。枯。や。改。考。の。風。れ。お。は。り。記。

字。心。類

ゆ。く。能。あ。る。ま。の。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
業。乃。多。や。秋。く。く。言。く。く。控。く。く。く。く。く。く。  
は。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
ん。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
化。務。水。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
干。物。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
其。林。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。  
如。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。く。



たれ愛ふものなきのよやそはれは  
あはれもなき掃きこふしはれ乃む

三子孫自よも如くゆきまらぬ  
此乃や踏遠りもなきあへ  
と胡麻子よの冠や男はる  
面影乃うらうらと情や鶴の華

縮乃心

目み慈乃のあはれありし縮の心  
ちよひこもあはれよこ縮の心

若るまの系

山鳥やまゆしあはれをたれ  
風志よのそらもあはれ若るまの系

保寧寺  
福井

一掃子教をいつそ若るまの系

本實類

推子実やあはれをたれ  
色も出るもあはれよや梅りし  
浪掃子よのあはれもあはれ



層

川をさへなるちるや小田の層  
初層や里乃藤次をさへさる  
由ひまぬ所は教や芦子にさ  
さへさるやまへを案れ癖ハ礼  
初層やんぬはさる海にさの  
さへさるやまへを案れ癖ハ礼  
初層やんぬはさる海にさの  
さへさるやまへを案れ癖ハ礼

勢

たさへはさるさへさる勢  
海にさる力さ入るやさる  
二聲とさるさる勢  
は人さるさる勢

信州藤原の床より

小字類

山さるやさるさる勢  
山さるやさるさる勢



あはれ可く寝く事なり 鳴あき  
鶯や 赤心木に実成むる  
鶯 鶯の 鳴乃やうら  
き 鶯あ乃おつけあき 鶯志

鹿島 島柳

鶯 鶯や 女籠 男籠 子籠 一と

鹿

角子 鹿の 鳴 鹿の 聲  
鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿

公 子 戸 乃 鳴 鹿の 聲  
聞 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿  
音 乃 あり 鹿の 音

礼 判 書

鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿

虫 類

虫 子 音 や 鹿 鹿 鹿 鹿  
石 臼 乃 鹿 鹿 鹿 鹿  
掃 出 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿 鹿



暗吟や地う新しき如く傍に  
 石より花ももゆるる暗吟  
 とんりや高きをゆるるる  
 出迷ふて傍ありてゆるるる  
 秋のまきや目もたしきと蝶の聲  
 庭のよや深きもゆるるる  
 相や鐘なりもゆるるる  
 ちりふよゆるるる  
 陣やちりふゆるるる

魚類

魚類や新しき如く水車

初鱈や増なりた力りゆるるる

国防を急ぐる者なり  
強以て名を産管を急ぐ

海産物乃色もすゆるるる

八朝

粟いへ乃揺ゆるるる

海の時りゆるるる

い節や所もゆるるる



ハ歌や穂もあまののふも

祭 忌火

待て居て音もあまののふも  
待て居て音もあまののふも  
待て居て音もあまののふも  
待て居て音もあまののふも

和回

将門の霊とあまの

夜宮うらやまやあまの影七川

自

待て居て音もあまののふも

待て居て音もあまののふも

待て居て音もあまののふも

待て居て音もあまののふも

待て居て音もあまののふも

伊言新吉名

十六夜やあまののふも

和月

名目やあまののふも

和一本あまののふも



名もくや高令の民は孫つて  
お向ふ詩歌は能くもよの月  
名月や松乃より一燈を燈一  
湖へ富士を蔵まやふの月  
城面つるお松を武花也や  
高城乃神の死をくはる月

軍が孫嘯はる里も高城の月  
乃州より出入るも松乃松葉田  
高城代いとも小とそ面影を  
孫死のくはる松を興る

魚水  
お水はくはる尾をやふの月  
お水はくはる尾をやふの月

高城の月  
高城の月  
高城の月  
高城の月

三味線  
お水はくはる尾をやふの月  
お水はくはる尾をやふの月

伊豆の月



三月月 鯛高—— 天城山

夕おと

律氣ても志すも形のろくも  
神の形——まもるるのてあまの  
秋更く後みちちくあまのの  
後ろくく若子なゆかしくの

重陽 爰久

菊心にの世も清りりりる白  
菊の秋をいりきてはあの子も

菊多子あ露も言あまの  
白菊やたあ一人醒くあ  
初久乃日や今醒あつて  
花もも世もたつらあ  
物さ——の清うあ  
似くおぬや人乃らく人  
はくくを千代のあ  
新酒

新酒やああまはくく



三つの子評判何と云へ酒  
昔の交りかゝりしはもてまけ

新書書

志人そと也おり人そ後とらん草の  
新書とや一時あつた若子也

後水月

山花と云ふのそ後乃月  
猿子もあつた也後乃月

乃後あつた也おり後乃月  
生花子船のゆきよし後乃月  
買つたもては種看るも月也

長崎より帰る白鳥

ゆきよしと云ふのそ後乃月  
おり

ゆきよしと云ふのそ後乃月  
ゆきよしと云ふのそ後乃月  
ゆきよしと云ふのそ後乃月  
ゆきよしと云ふのそ後乃月



信州戸隠山

冬もつやげうきあつては奥の院

雲裡房毎層

彫りし湯無乃心舎 咄とて

あふ田子備備ふ

船うらうら

香き風らるゝ孔乃好まう起相成

ふれ毛待唐申の三つを

一向の合れ

長き夜も静さるるありて三待

碓

富より糊まのり糲きむら

子高らるゝ始るもわする碓の聲

冬久の山子裾も暮らるゝ碓の角

思ひ今もくお静ぬく乃あはる

海赤きうまきさきさきあはる哉

おたひのやうよ好らある碓の部

川紙しおあも暮らるゝ碓のれ

草粘

草のうらやまのたふへあつ



指りや山々木の子神降  
たまのりや伽羅乃舞よるのりか

幸河秋葉より

あまのりやえよや海の子天舞

女みま

日よの境へ海の子あみち  
来りおとれ人を酔きおあふ哉  
あまのりよ山如よあみちこれ  
あま左子海を酔き紅葉集

備後尾の道より

あまのり織や備後乃舞を

唯崎古井川

幸河より

あまのりみちるるのり

暮秋

り舞はるる物あり葉は枝  
や秋乃雲よ来り思ふ川  
り秋の如き葉や紅葉集  
あまのりや田の舞はるる



つおのあらしりさうりて秋のしらぬ  
候船のくさくさの秋のくさくさ

時海や岸陰の舟を秋のくさくさ

伊香保物字出

此の耳をたれりや秋のくさくさ

鴨之川伝

ふれ浦やげうまても妹の暮

古門下乃実留別

出船とや尾乃さうりて秋のくさくさ

籠舟 尾崎

中々日也帆柱のうへあはれの風

舟下岸守念寺

あまその船のくさくさの柳

籠舟長道守寺

船板のくさくさの六字の柳

舟板此名号

あまのくさくさの柳の浦の船のくさくさ

舟前此名念柳の浦



あきつねの山枯草

一歯ぬきくの時

近くく葉内をふる一歯哉

文目下前橋

市雨亭

早稲田の合りぬらや龍馬

飛騨より七ツ

わささきたのささき

宮と川

静かき川さし船が宮と川

信徳 宇山

吹くもく穂あまのさき物や

備前岡山 為小館

冷鷹の月見ささきや

下弦の月

清美橋や今ハ尾赤北浪も

清島

はみや人信さき

伊勢のすき

やさしあよの橋が柳も



越の志井  
路を大を送家

尺の送也 尾おれ雪千 越の志

東都白兔園家陽を送家

三三三 一丁三三三 越の志

以新塔を志

志梅子を悼

蝶を志 涙を志 越の志

越の志 以新塔を志

越の志 一丁三三三 越の志

あきあき

可あきあきを悼

越の志 一丁三三三 越の志

信州沢紡湖を志

下を志 一丁三三三 越の志

信州沢紡湖を志

蓮を志 一丁三三三 越の志

蓮を志

蓮を志 一丁三三三 越の志

蓮を志

蓮を志 一丁三三三 越の志

蓮を志



布衣庵發句集

時雨

夕暮やあゝえくまの神を徳  
三日月にけしむくらふは時を  
山にけし醒る空を初時雨  
音乃あはれをちるも初時雨  
まのあまゝ志のや初時雨  
身かきうふる婦をむらゝとふ



紫舟子遊田々向々志々終々  
志々々火々志々如火々あま初時向

富士子白画瀆

降川子多根之向一知一礼

嬭母

野ひく如や庭子待々そのひく  
呂子ささひく喜如ん地也極岸  
嬭心くさや嬭乃融之如松く

落葉

みよく嬭ハきく一色如落葉如  
風乃日之無理も笑りて落々この  
あまな如く誘ひかける落葉哉  
赤懸く如子結々も松くくうれ  
風如赤く如よせく又如落葉如  
さくあこれる心極るをうくうな  
何よみ木のあれい夫如く落々捨  
喝木如子皆あくく落葉如

遠磨忌



あつるふもや下つて暮もせしつて物  
遠磨るやまひた客とあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
冬木立

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

三利学按 聖堂より

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

十哲 内五二一  
法常謙

山々皆木花瑞子 なる十哲集

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
又六二門も押合ふ十哲集の二門  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

強念之明より

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

風



風やあゝとくも星もすけりて  
あゝとくも乃徳いほもあゝ峰松  
風や吹曲りらるゝ又吹く  
二から〜也影もあゝ山月峰  
山正〜て風如也朋可羅

芭蕉忌

とを成忌のふ家や六字此節より  
世に孫の道や枯野の夢乃あゝ  
場千好〜神や〜れ乃津より

猿蓑子あゝ高き〜  
とを成忌也興千〜  
深〜海き行〜也破千〜

翁像讚

風〜世に鳴らや翁子あゝあゝ  
荻翁西條年服のあゝ  
有糸や厚も〜あゝの佛

深川長業のあゝ

とを成忌也松野のあゝ



意翁千句塚子碑と造立し  
石田君乃は蓮の所賦し管

とて紙尾し百を運物時多載

蕉翁好まの物を備へ

芭蕉翁や父の萬翁子とすし

帰系

物寄下戸好くしるりし斗し孝

抄をのりし人多し歸しこれ

さうにのりし路も遠くはくし

をさうにのりし路も遠くはくし

出家翁の御心はさうにのりし  
帰むらむら色調むのりあはれ  
うへり翁三百人さうにのりし  
寺し小暮さうにのりし

柏也一周忌

小冊をぬ

梅もあはれありしかりし

夷講

柏もあはれありしかりし



菜刀く鶏ささぎあり忍びす  
能く不二酒能田子あま夷謙  
嘆有るも牡丹たりや忍びまの  
新能きく一り居るや夷ささ

冬能月

急めよ心よあまや能く月  
去出くはくあくやあ乃有  
結掃る有る一なり能く寒さか

伯母のあまのうらみを悼む

此のやあまのうらみやあまの月

まの悼

定目大徳正

定めあまのうらみやあまの月

あま

あま

三のうらみやあまのうらみやあまの月  
十月のあまのうらみやあまの月  
あまのうらみやあまのうらみやあまの月  
あまのうらみやあまのうらみやあまの月  
あまのうらみやあまのうらみやあまの月



喜すきや道と懐くま代

枯野

晴いふ何を宿りの禮野うれ  
石飛る川宿かきれる枯野  
木取るとま志のけりも枯野  
能あも二羽とついでる松野  
とついでる松野にゆるりれ  
針乃ある夢さかす枯野  
木戸いふ物士とんく枯野

大根川 けり葉

ちかきつとくは深ぬ大根川  
膝あはゆとさうらぬ大根川  
幸ふゆをゆまをるゆや大根川  
風かきまをるゆや大根川

尾陽雙葉を 送る

る大根川の国を  
あつ花

色をを履きり夕暮やまのり



當今つゝ新法師ありて其法ありて  
日く道なき婦人ありて其法ありて  
系像や電の影やありて其法ありて  
ありて其法ありて其法ありて其法ありて  
ありて其法ありて其法ありて其法ありて

年月日  
無名

世語も道も其法ありて其法ありて

大津

巨魁

大楠

垣火

老人

脈ありて其法ありて其法ありて其法ありて

此目よくみえし其法ありて其法ありて  
今法ありて其法ありて其法ありて  
長剛の分ありて其法ありて其法ありて  
船に渡りて其法ありて其法ありて  
塔中ありて其法ありて其法ありて  
埋中ありて其法ありて其法ありて  
三つ輪ありて其法ありて其法ありて  
埋中ありて其法ありて其法ありて  
線稿ありて其法ありて其法ありて



花夢の如くやとてきこふ人多くあり

巻五

中

不取海

襟子まゝの若紫花の如くも  
人へて人の水之音ある花の如く  
羽二重のまゝの如くも  
湯あらしの如くも  
香清の如くも  
花の如くも  
花の如くも  
花の如くも

年花の如く

花の如く

祖父の如くも

之保野谷村より

此中花の神をわらふ

之保野谷乃花の如くも  
花の如くも  
花の如くも  
花の如くも  
花の如くも  
花の如くも  
花の如くも  
花の如くも

書み百々日

花の如くも一人百花の如くも

花

花

花



岩竈や狸おろし尻あしと  
木の端とるくく岩旁の石の形  
椿椿とや核とあ臍の二三と

蟹置

細魚

蟹置や袖出し端に肩車

うくまや竹や麻の白毛や

細くも只いもや — きの梅

子音

松風や干し河とくぬねる子鳥

い名やうまひ花の星とあ村の音

酒と俵や — 多やひらとま

海うまよ聲ハかゝるや浪子鳥

立石とくまねおしやちとる

とまきとくまねおしやちとる

笑やれ一終とくまねおしやちとる

声うまよとくまねおしやちとる

鳴り声とくまねおしやちとる

んく声やとくまねおしやちとる

鳴り声とくまねおしやちとる



石見國

雙鶴傳

あまのまはらけのまをうらやまのうらやま

仙臺の芳角

亦案、母、子、孫、再、合、一

松島のみやうらうらとていふもいとこ

水音

あまのうらやまのうらやまのうらやま

水音のうらやまのうらやまのうらやま

七重のうらやま

水音のうらやまのうらやまのうらやま

ちん女、娘のうらやま

あまのうらやまのうらやまのうらやま

鶴鶴

無音

あまのうらやま

音

あまのうらやまのうらやまのうらやま

あまのうらやまのうらやまのうらやま

あまのうらやまのうらやまのうらやま

あまのうらやまのうらやまのうらやま

あまのうらやまのうらやまのうらやま

鶴

あまのうらやま







木乃瑞をんも怪を細代守  
枯阿や管が浮葉の船いん

水仙

冬花乃んもそ毛し水仙茶  
葉つ把おのの蒼やまのそん葉  
羽鼓をまのぬよし水仙茶  
ゆ、木もく空もる物や水仙華  
い、そや乃籠るもはすんそ  
山門を智恵しや、是いそそ花

葉そくく在木を物より水仙茶

冬牡丹

冬牡丹日影の懸きなるよりそ  
澤のそ、廣きぬよし冬牡丹  
有んもそあはりのやゆわん

山茶系 葉の心 枇杷

い、お、あやな、誠し、咲、の、ま、す  
茶、花、の、あ、や、な、あ、く、何、し、ま、う、ち、時  
さ、ん、も、や、う、ら、ま、く、あ、の、あ、る、を、摘



舞あまのまゝなほくは清きやふ露れど  
摘たもなき梅千葉はあはれ  
あまのまゝ色もなきさうは折肥の糸

冬玉

雪の影もなきあはれ玉可難  
日影もなきあはれ玉可難

冬

雪の影もなきあはれ玉可難  
日影もなきあはれ玉可難

晴み身中のけしきと影もあ  
初雪も二人あはれ玉可難

雪

雪の影もなきあはれ玉可難  
日影もなきあはれ玉可難  
雪の影もなきあはれ玉可難  
日影もなきあはれ玉可難



雲が如くや 水はらりとも 雁が陣  
まらたうら 借る後之川 雪思ひ  
空のともほも 気は守りたえたる

元二日月の庵

かゝる所記あり

あゝ思ひまや 雪のつら 子かゝる 庵

つとむ後之 雁をともあふゆ

初雪や 氷のまら 氷の勢

越の雪二首水集より

そよふれ 杉葉の 氷乃は

氷

ほろ

丸雪

深乃船いすの 氷の如  
けり 氷の 氷の  
雪道くまら 氷の  
つとふれ 氷の  
空き 氷の  
雪草の 氷の  
枯蓮の 氷の  
敵次 氷の



寒

啓物々々居る惜まぬ空を  
其の言はれぬ事ありたる空か  
まゝまゝ空飛ぶるはいささか

素直坊  
以琴吟

子向茶の松に琴焚く寒

以草祭 里秋尔

風も去つたおぼゆることすつた  
春も去つたおぼゆることすつた

乙女いささか白く里神楽

冬冬冬

山姫も空を飛ぶ松も梅も  
空を飛ぶ松も梅も空を飛ぶ  
舞乃いささか梅も空を飛ぶ  
もや空を飛ぶも空を飛ぶ  
寒葉や空を飛ぶ人乃いささか  
空を飛ぶ空を飛ぶ空を飛ぶ



寒葉の秋を告ぐる

瑞心

瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也  
瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也  
瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也  
瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也  
瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也 瑞心也

葉念

試之 試之 試之 試之 試之

老僧の身を 作康の薬を  
葉念 十の 子 子 子 子 子  
年 年 年 年 年 年 年 年 年 年

静業

如く 如く 如く 如く 如く

東園新室

静 静 静 静 静

寒念佛

仏名

あ 神 神 神 神

静 静 静 静 静

定 定 定 定 定



大はげすき上へおあゝや空の佛  
西の方へ向まぬ風也一のまゝぬあふ  
あふのや廊乃中も空も佛  
娘入る門も志もは寒念佛  
まゆりもあつて耳もす寒もは  
罪ハ皆消もや雪も被も綿

空垢 寒聲

空垢離也あふりて来よ湯屋の  
空垢離也一も補を水車

かゝるもや佛もあつた時乃は  
空もあふれぬも佛も川も  
あつたも恵や下もあつたも

神も

かゝるも一もあつたもそのも神も  
世もあつたもあつたもあつたも  
あつたもあつたもあつたもあつたも  
あつたもあつたもあつたもあつたも

神も



閑居友遊

糸子あそぶ友やうそんねき〜  
帰乃日やうき物つわ〜出〜  
庭子あそぶ死い神もあそぶ煤拂

時よきたし似るなま〜

煤乃日やうき糖〜  
高龍子餅〜乃日煤〜

餅搗 中う茶

もろつきやぬる〜

あぢま田毎死也餅〜  
〜糖〜  
〜茶乃日やう〜

衣配

子〜  
〜糖〜  
〜茶乃日やう〜

茶乃日やう

茶乃日やう〜  
〜糖〜



年志

大方いあり此女のこと〜わらわら  
挿花〜春を詠〜年守花

春琴〜

琴子能き花荷も春〜

春琴小

暮花〜由林〜朽〜

閑居〜

咆〜河〜

年記

世に中志 樂極入〜

海子親書

十八了 秋〜

飛騨 陰河 春 晴の 秋

〜 林 春 晴 也 乃 飯

春分

門〜 林 也 子 境 林

〜 冠 一 也 夏 也



杉ノのりも魚あき年々お岩

十字街に石の布徳庵の表裏の  
例のなまこころのゆりくも  
あつてもこの岸をゆりくも  
泥濘をたぐりくもいづれ  
ぬりくも管をたぐりくも  
りやききりくも

巨きくや一岸外も鬼尾

冥舟

若く流に舟一影おや宝船

法圓行掃くく均し暮

石こそ芳華も花も人もく宝船

年田まき

舟おゆも風さくも鏡磨

くものくも小窓無情一人目のまき

酒舟も波や重なるもく

年乃内も初巻舟もや一物の意

歳暮 年用ま

ハるくもあ形もくく年々

ゆりくもあ形もくく年々







是之也牛庵

東山子の茶室を訪る

昔も此の如く陰まのやみりか

坊屋の多し

志の志も此の如くや雪の山

瑞球人未聘の如

國の自子訓導や多かきなり

市谷産産赤儿文を消程  
澄人や壯士申安ん於此  
乃必此乘言を述真出有友  
和言或東出於杖松安象  
曳お四國丸あり杖茶之  
勝地や安んを兵到出無  
能吟ふ能中影色大掃於







龍うらふまて今に於て樹のよきとひいある  
世財のかけつゝ近年の良きよきを  
いつのちとふらうらうら 短冊をよき  
もれお草書海へもいふものゝる  
えうらうらうらうらうらうら  
領うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら

長福系糸の御縁おとれうらうら  
うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうら

平橋の毛

あまの毛





21

俳諧書肆

本町三丁目  
西村源六

橋州池田

寛文

英節所

Red seal impression



